

第3回全学教育(FD)研修会「授業改善計画の作成について」

2004年5月20日

開会にあたって（司会：沼田誠経済学部教授）

それでは、第3回の全学教育（FD）研修会を開催したいと思います。なお、本日は経済学部の沼田が進行役を務めさせていただきますのでよろしくお願い致します。

先週行なわれました学内の認証評価説明会の中で、学長あるいは山本教務部長から結果の検証を行い、それに対して何らかの対応をきちんとしていくことがこれからの大学の中で非常に重要であるという提言がなされたかと思います。そういう意味で言いますと、今日の研修会は結果の検証に対する取り組みという、私達がこれからやらなければいけない事柄についての研修会であると位置付けができるかと思います。

この研修会の位置付けにつきましては、学長や山本教務部長から詳しく説明があると思いますが、私達にとってもかなり大事な取り組みであるということを念頭に置いて、4人の先生方のご報告をしっかりと聞いていきたいと思います。

また、4人の先生方のご報告を私達自身も積極的なかたちで利用していく場にもしていきたいと考えておりますので、皆様のご協力をお願い致します。

それでは、まず学長からご挨拶をいただきたいと思いますので、よろしくお願い致します。

学長挨拶（竹下守夫学長）

学長の竹下でございます。先週、今司会の沼田教授からお話がありました認証評価説明会でご挨拶をしたばかりでございますが、今年度のFD研修会を始めるにあたって、一言本日の研修会の意義について、お話をさせていただきたいと思います。

FD研修会は、今更申し上げるまでもなく、大学の各教員一人ひとりの教育・研究能力の向上に向けての努力を当然の前提とした上で、そのような個人の努力を超えて、組織としての教授団の研究・教育能力を開発することを趣旨と致しております。国際的にも、近年、ファカルティ・デベロップメントの重要性が言われておりますが、その基礎には次のような考え方があると思います。

それは、教育・研究が、各研究機関を超えた社会全体の必要に基づく公的な営みであるという認識であります。これまで大学は、学問の自由、大学の自治を求め、これを保障されてきましたが、学問の自由あるいは大学の自治は、国家からの干渉に対して守られなければならないとの面が強調され、社会との関係では、知の体系としての学術が社会の発展の基盤であり、それ故、知の創造・継承のために、社会から大学に負託されたものであるとの認識が希薄であったように思われます。それが、近年に至って、大学における研究・教育は、社会から負託された公的な営みであるとの認識が深まり、それ

と同時に、この負託に応えるべく、組織として研究・教育能力の開発に努める責務を負うという考え方が広まってきたのではないかと思います。わが国におきましても、平成13年に公表されました日本学術会議の「学術の社会的役割」という報告書の中で、「負託自治」という言葉が使われており、そこではただ今申しましたような考え方が示されております。

本日のFD研修会は「授業改善計画」をテーマとしております。本学でも数年前から、学生による授業評価を行って参りましたが、当初は、それぞれ学部が独自に実施しておりました。しかし、それでは、学生の授業評価を通じて、本学全体の教育の現状を把握するには十分ではないと考えられますところから、2年前より全学的方針として全学部統一的な授業評価制度が実施されるようになりました。このように、全学的な方針として学生による授業評価を行う以上は、当然その結果に基づいて、授業を改善するための方策を考えなければなりません。そのことについては、恐らくご異論がないと思います。問題は、そのためにいかなる方策をとるべきかであります。

学生の授業評価の結果に基づいて、授業をどう改善していくかということは、「各教員が自由に定めるべきだ」、「それぞれの責任でやるべきだ」という考え方もあり得るかも知れません。確かに、授業評価の結果に基づいて、いかなる改善方法、改善計画を定めるかは、第1次的には各教員の責任であろうと私も思います。

しかし、問題は、いかなる改善計画を立てたのか、そしてその改善計画が計画通り実施されたのかを、客観的に検証可能にする必要があるのではないかと考えております。従って、われわれ一人一人が、頭の中あるいはパソコンの上で改善計画を作ったというだけでは、それが外部から客観的にトレースできないものである以上、不十分と言わざるを得ないのではないかと思います。そういった検証の可能性が要求される理由はいくつかあると思いますが、差し当たり三つのことを申し上げたいと思います。

第一に、現在では、わが国においても、公正な社会を作るために公的な意義を有する社会的な作用・活動には透明性が求められているということでもあります。専門家が社会的に負託された公的な専門的業務を遂行する場合にも、専門家にそれを白紙委任するのではなく、社会の構成員がそれをチェックできる仕組みをつくることが要請されております。このことは、今や国際的なルールになっていると言ってもよろしいのではないかと。そういう観点から、大学での教育は、専門家である教員に一任せよということは許されず、まず学生の授業評価の結果に基づいて、どのようにそれぞれの教員が自分の授業の改善計画を立て、実施しているかを客観的に検証できるような透明な仕組みを作ることが求められると言えるでしょう。

第二に、前回の認証評価説明会でも申しましたように、残念ながら今、社会には大学不信の念が非常に強くなっております。これは、皆様も常日頃ひしひしと感じられていることだと思います。われわれは、こうした社会の大学不信を解かなければなりません。

社会のそうした大学不信は、決して根拠のない猜疑心によるものだとは言いきれません。教育に関する社会的責任を本当に果たしているのか、大学ないしは大学人の倫理が問われていると言わざるを得ないのであります。教育の改善に向けて真剣な努力をしているということを、社会、その中には学生やその保護者も含まれますが、そのような社会に向けて示していかなければなりません。そのためには、やはり客観的に目に見えるかたちで、授業の改善のために、どのような努力をしているのかを、外部から分かるように示さなければならないわけであります。

さらに、第三に、これが一番直接的な問題ですが、司会者から指摘がありましたように、本年度から法律上の義務となった認証評価を受けるうえで、学生の授業評価を教育の改善にどう生かしているかを客観的に明らかにする必要があります。これは、そうした認証評価制度に伴う、やや技術的なあるいは非本質的な問題と受け取られる向きもあるかもしれません。しかし、認証評価自体が、前回も申しましたように、社会全体のものの考え方あるいは必要性に基づいているのですから、その認証評価制度の中で、本学として十分に社会的な責任を果たしていることを示す必要があります、その一部として、学生の授業評価の結果に基づく、授業改善の仕組みを考えていかなければならないわけであります。

全学教務委員会では、こうした考慮のもとに各教員の皆様方に、授業改善計画を作成・提出していただくという原案を立てられたと思います。この原案に従って、4人の方からのご報告を聞く予定になっているようでありますので、その報告を踏まえて、この原案を採択すべきか否かにつき、十分に議論を尽くしていただきたいと思っております。

恐らく、会場の皆様方の中には、「自分の考えは原案とは違う」、「原案に反対だ」というご意見の方もおられると思いますが、認証評価を受けるための準備が始められているという今の状況を考えますと、私と致しましては、反対意見を述べられる場合には対案を示して頂きたいと思うのであります。ただ今申しましたように、客観的に検証可能な授業改善方法を考えなければならないという現実の必要に迫られているわけですから、原案には様々な疑問があるというだけではなく、「そのニーズにはこういう方法で対応すればよいではないか」という対案を示していただくことが、この場での議論を建設的な方向に進めていくことになるかと考える次第であります。

それでは、以上をもちまして始めのご挨拶とさせていただきます。どうか時間の許す限り、熱心なご検討をお願い致します。どうもありがとうございました。（拍手）

（沼田）

どうもありがとうございました。申しおりましたが、この研修会は1時間半を予定しております。開始が定刻より5分遅れましたので、4時35分頃には終了したいと考えておりますので、ご協力の程よろしく申し上げます。なお、質疑応答につきましては、

時間配分として 20 分程度用意しておりますが、その際に各先生方から質問をいただきたいと思っております。それでは、山本教務部長から本研修会の趣旨についてご報告いただきたいと思っております。

教務部長からの趣旨説明（山本耕一教務部長）

教務部長の山本です。恐縮ですが、着席のままで話をさせていただきます。

学長からもお話がありましたように、既に本学では、過去 2 年間全学統一方式の授業アンケートを行っております。しかしながら、授業アンケート結果をどのように授業改善に結び付けていくのかということが、手付かずのままでした。

したがって、この件に早急にとりかかる必要が生じたわけです。授業アンケートを軸にした F D は、最終的に授業アンケートを授業改善にまで結び付けて完結することになりますので、今のままでは目標の半分しか到達していないことになります。

全学教務委員会が開かれるたびに予告はしていたのですが、なかなか授業改善計画書の現物が出せませんでした。この点では、現物をお示しするのが遅くなったことについておわび申し上げます。

さて、全体の趣旨について細かいことを申し上げますと時間が足りませんので、概要についてお話することで、全体のコンセプトを把握していただきたいと思っております。

まず一つお話し申し上げておきたいのは、「授業の改善には、これで終わりということはない」ということです。

恐らく、皆さんは日々授業ではご苦労されていると思います。われわれが大学の教師を続けていく限り、これは避けて通れない問題でしょう。いくら工夫しても終わりが無いというのは、ある角度から見て、去年あるいは一昨年に比べれば格段に良くなったというようなことがあったとしても、授業の改善が完成されたというようなことではないということです。

授業改善計画はあくまでも自らの授業に対する「自己点検・自己評価」とお考えいただきたいと思っております。あくまでも「自己点検・自己評価」ですから、一ここがポイントとなりますが一自らに課すハードルはあくまでも高めに設定していただきたいと考えています。授業改善計画書のフォーマットには、「…の場合には、…と…についてお書きください」と記載していますが、これは、認証評価でいえば評価項目に当たるようなものです。つまり、全く何の手掛かりもなくして自己点検・自己評価は実施できないため、このようなガイドラインを提示させていただきました。

例えば、「アンケートの回答者数が単位を修得した学生の 60 パーセントに満たない場合に理由を考えてみてください」という記述がありますが、この数字はあくまでも暫定的なものです。たとえば、授業の規模という問題があります。規模の違う複数の授業を担当されている場合には、当然そこで比較考慮が可能となります。「自分が担当して

いるこの科目であれば、60%ではなくて70%の学生が単位を修得して然るべきだろう」等の裁量をご自分で行っていただき、その際にはハードルを高めにご設定していただきたいと申し上げているわけです。

全体の流れですが、現在、構想されている案では、シラバスと同じように電子媒体で所定の書式をお届けします。書式及びフォーマットについては配布資料と同様です。このような様式を添付いたしますので、学長宛にご提出いただきます。

授業改善計画書が全て提出されますと、少なくとも個々の授業についての授業改善の試みが出揃うことになります。当然のことながら、授業改善計画書の回収率は高いほうが望ましいものと考えております。

さて、その先はと言えば、皆さんからご提出いただいた改善計画書を、例えば事務ファイルに閉じて保管するだけでは、FDとしては決して十分ではないと考えています。

従って、提出された改善計画書の中から授業改善のヒントになりそうな事例を集めた「事例集」を作成することを企画しています。「事例集」は、統一のフォーマットに記述いただいた改善計画書だけでは十分な理解を得られないと思われるので、読み切り形式というか、読んで「なるほど」と思えるような形式を考えています。所定の様式に記述いただいた分量を1.5倍から2倍程度の分量に膨らませたものを40事例ぐらい収録した「事例集」を作成したいと考えています。

現在では、このような刊行物は他大学に送るとというのが通例となっています。外部に公表することの可否については、例えば全学教務委員会の場でこの内容ならば公表しても恥ずかしくないということになれば、広く周知することも吝かではありません。やはり、公開性が求められる昨今の状況から、送る、送らないという問題はかなり重要なファクターになると思います。しかし、あくまでも主眼は本学の中での授業改善ですから、皆さんに何か考えていただく、あるいは何かを実践する上でのヒントを提供したいというのが大前提となります。

授業のスタイルというのは百人百様で、しかも、同じ教員が担当していても、授業が異なれば必要なことも全く違ってきます。従って、模範的な授業を視聴して、それだけで良い授業ができるかと言えば、そのようなことは恐らく有り得ないでしょう。

これから4名の教員の方にお話しさせていただきます。

その中で、当人は大したことではないと考えている中に、「自分の授業には、これは参考となる」といったヒントを見出すことが、他人の授業をヒントに授業改善を行なう際の、むしろ一般的なスタイルだと思います。個人的にも、他人の話を伺っていて、むしろディテールの部分で何かひらめいたりすることが多いという実感を持っています。

従いまして、「授業改善計画事例集」についても、「模範的な授業を紹介するのは是非真似てください」ということではなく、多くの方にとって、授業改善のヒントになり得る可能性を持っている事例を「事例集」に積極的に取り上げたいと考えています。

先走りの感もあり、大変恐縮ではありますが、「事例集」に取り上げる授業改善計画書を記述いただく方には、相当な負担となりますので、できる限り今回の授業改善計画書の提出後、間髪をおかず執筆のご依頼をしたいと考えています。

これは理想ですが、可能であるならば4年に1度は皆さんが「事例集」にお書きになるようなローテーションを組めれば、負担の公平化という意味では好ましいと私自身が勝手に考えています。

授業改善計画書作成の目的は「自己点検・自己評価」ですから、今回のフォーマットに記述されている基準はあくまでも一つの目安として紹介しています。ただし、あくまでも授業アンケートに基づいた授業改善計画でなければいけませんので、その点についてはご注意ください。少し細かいことに触れますが、先ず、それぞれの項目について「3」を超えるようでしたら、少しお考えいただきたい。例えば、「内容の理解」について「3」であれば、学生諸君は少し理解度が足りないと推察されるので、御一考いただきたいと思えます

次に、この先は各々のご判断によりご自由ではありますが、「3」を切るようでも全体平均より数値が良くなければ、これを手掛かりにして改善計画を立ててみようかというように、発展的に取り組んでいただければと思います。

最後に、数値とは関係なく、ご自分が担当されている授業を通じて、「学生の反応を考慮して、自分としては是非試したい」というアイデアが出てくると思えます。

私と致しましては、概ね以上の三つのスタイルがあるものと考えています。

次に、配布資料の2ページを見ていただきたいのですが、「A」から「F」まで成績をつけて、「F」評価の学生が35パーセントを超える。これは、「X」を除いて考えていただきたいのですが、35パーセントを超えている場合には少し神経質になっていただきたいと思えます。というのは、われわれにとって大きな課題は、常に学生の水準、学生のレベルを的確に把握しているかであり、ユニバーサルアクセスの段階に入った大学においては、もう「大学一般」といった通念は存在しません。

駿河台大学の学生すなわち今日の前にいる学生、その学生に応じた授業ができるかどうかということが、教育効果が「上がる・上がらない」の大きな分水嶺になると思えます。今回の授業改善計画書の作成においては、その目安を一応35パーセントに設定させていただきました。この35パーセントを超えるようだと、学生にかけている負荷が少し大きいかないというラインです。これは、1パーセントを超えたから云々というわけではありませんし、「今回は高いが、これには合理的な理由がある」ということであれば、それはそれで結構です。その他にも同種の数字が挙げられていますが、これらは全て一応の目安とお考えいただければ結構です。

最後に極端な例を挙げて、皆さんには大体こんなイメージで授業改善計画書の作成に臨んでいただきたいというお話をいたします。

皆さんは1週間に概ね6科目程度の授業科目を担当されていることと思いますが、6科目全てのアンケート結果が悪く、しかも、その全ての項目についても悪いというケースを考えてみます。このケースでは、全ての授業科目並びに全ての項目について授業改善を行おうというのは無理と思われます。

こうした場合には、手の付けられるところから、例えば6科目の内の2科目について重点的に記述していただき、その2科目の中でも、特に二つの項目について、掘り下げてお書きいただくというようなやり方が現実的ではないかと思われます。

全てに欲張ると、気持ちが重たくてなかなか進まないと思います。ケースによって、ある程度重点化して考えていただくことも必要です。

また、授業改善計画を立てたからといって、それだけで授業が良くなる、1年ですぐ良くなるということはありません。

例えば、「事例集」に掲載された例であっても、実行した場合に翌年度はうまくいかず失敗であった、しかし、その次の年にはそれなりの成果を収めた、恐らく、こうしたことの繰り返しにより、大学の授業ないし授業改善は進められると思います。

従って、授業改善計画を記述した翌年に、計画どおりに実行して失敗した場合はどうなるのかといったことについてご心配になる必要はありません。こうした取組は、挑戦というか、粘り強く、あるいは、次々と手を替え品を替えて試行錯誤していくものと思います。ゆえに、思い切ってハードルを高い所に設定していただき、後は自己点検・自己評価ですから、ご自由にとという言い方は少し乱暴ですが、熟慮・工夫の上でご記述いただきたいと思います。そして、その中には、きっと他の教員が授業を改善する上で参考となるコンテンツが含まれていることと思います。

丁寧に説明しようとするれば、いくらでも時間をかけることもできますし、結局中途半端な説明をしてしまいましたが、4名の教員の方に、実際に「授業改善計画書」をご記述いただきましたので、それをご覧になりながら、あるいはその発表を聞きながら、凡その勘所を掴んでいただければと思います。私の話はこれにて終了いたします。（拍手）

（沼田）

どうもありがとうございました。それではこれから4名の先生方にご報告をいただきたいと思います。まず、最初に経済学部の前田先生からご報告をいただきたいと思いますので、よろしくお願ひ致します。

事例報告①（前田悦子経済学部専任講師）

経済学部の前田でございます。申し訳ありませんが、座ったまま話をさせていただきます。先生方のお手元には、授業改善計画書及び授業アンケートの結果に関する資料が配布されているかと思っておりますので、両方をご覧になりながらお聞きいただければと思います。

私は「経済学」という講義科目で作成致しました。こちらは授業改善計画書をご覧になればお分かりのように通年科目でございますが、「マクロ経済学」と「ミクロ経済学」の部分で、2名の教員で分担しておりますので、私が担当した春学期のアンケート結果によるものとなっております。

まず、「（1）アンケート結果全体に対するコメント」に書きましたが、受講者数 88 名に対し、アンケートの回答者数は 63 名でしたので、全体の 72 パーセントに当たります。そして、「X」を除いた成績評価対象者の回答率は 85 パーセントでした。また、春学期時点で成績評価対象の 28 パーセントがF評価になりますが、こちらは春学期終了時点で単位認定した場合に、単位取得学生数は 53 名程度ではないかと想定したもので、括弧付きで表に記入してございます。

この授業では出席は取っておりませんが、これらのF評価の学生を見ますと、2回行った小テストの両方とも、あるいはどちらか1回を受けていない学生がほとんどである状況でしたので、おそらく出席率も悪いものと考えられます。また、「X」を付けた学生のほとんどは4年生で、特に法学部の4年生が多かったのですが、定期試験はもちろん、小テストも2回ともを受けていない学生達でした。途中でリタイアした学生もいたのですが、登録をただけの可能性が高いと推測しております。

この「経済学」は非常に熱心に授業を聞く学生がとても多い授業で、出席を取らないにもかかわらず、割と高い出席率でした。授業が終わった後に質問に来る学生も少なくない状態で、中には春学期を終えて秋学期になっても、「経済学について興味があるのでお話ししたいのですがよろしいですか？」とオフィスアワーの時間に訪れる学生もいたほど非常に熱心でした。

こうした傾向は、Q4の「履修した理由」に対する回答で、「関心を持っていた」学生が 23.8 パーセント、「将来役に立つ」が 28.6 パーセントという結果からもよく分かるのではないかと思います。

また、Q4で「時間割があいていた」と答えた学生は 28.6 パーセントに上ることから、その理由により出席率が良かったのではと推測できますが、「将来役に立つ」という理由で履修していた学生が、全体の平均と比較しても非常に多かったので、目的意識を持ち、何かしら吸収したいと思って授業を受けた学生が非常に多く、そのために授業の雰囲気も良かったのではないかと考えております。

従って、私に要求されているのは内容理解あるいは知的満足を高める授業に改善す

ることであり、また、そうした努力を続けていく必要があると感じております。

ガイドラインに則って、次の「(2) 内容」についてですが、まず、「Q9：教員の意欲」については、私に対する評価は1.5であり、「大変意欲的」と回答した学生が6割程度いました。「やや意欲的」を含めると92パーセントの学生が「意欲がある」と評価してくれています。私としては現状が精一杯で、この項目においては、これ以上数値を上げることは相当大変だと感じております。

しかし、Q9以降については少し問題を抱えておりまして、「Q10：目標の明確さ」、「Q12：内容理解」、「Q13：知的満足度」については、一応「3」はクリアしておりますが、大学全体の平均から見ると若干悪いということになります。

講義目標については、始めのガイダンスの時は勿論ですが、セッション毎に前もって伝えているつもりでした。しかし、「明確」と答えてくれた学生が6割に過ぎなかったため、私の説明不足あるいは今のように立て続けに話してしまう話し方が原因ではないかと反省しています。

もう少し分かりやすく示すこと、できれば毎回の授業目標を「今日はこういうテーマについて講義します」、「ここはポイントですから覚えましょう」というように促す努力をする必要があると感じています。あるいは、もし時間に余裕があれば、最後にもう1度、その日の授業目標を示したいと思っております。

色々やりたいテーマはありますが、授業の中で特に大事な部分については、他のテーマを削ってでも時間をかけるといったように、広く浅くとならないよう、深く掘り下げるべき部分は数回繰り返してでも理解されるように時間をかけるなど、めりはりのある授業へと改善していきたいと思っております。

そうした努力を継続することによって、学生も「この部分が大事だ」、「この部分はこういうことだ」とわかるでしょうし、あるいは何度も繰り返すことによって覚えてくれば、内容理解にもつながり、結果的に知的満足度も上昇するのではないかと考えております。

続いて、「(3) 方法」ですが、「Q11：授業の進度」については非常に問題があります。この数値の理想は「3」であり、全体の平均は2.6ですが、私に対する評価は2.2という結果でした。すなわち6割もの学生が「進度が速い」と回答しています。

この点に関しましては、同じ内容で授業名だけが違っている経済学部対象の「経済学概論」よりも、「経済学」の方が実際の授業回数が少ないことに起因すると思われる。授業回数が少ないというのは、最初のガイダンス時では、例えば「マクロとミクロを分けて勉強します」といった話をする際に、「マクロ経済学とは何か、ミクロ経済学とは何か」という話もしなくてはなりませんし、勿論初めて経済学を学ぶわけですから、「経済学とはどのような学問か」といった話から導入していかなければなりません。

つまり、秋学期に担当する際に「マクロ経済学とはこういうことです」と復習する

ように話をするのとでは、時間のかけ方が違ってくるのです。物理的な回数が少ないのに、殆ど同じ範囲の内容を教授しようとした私のミスであると考えております。途中でそのミスに気がついた時には、必要不可欠なテーマが残っていたために、その結果として、授業進度を速めてしまいました。

特に、アンケートを採る前の辺りから少し授業進度を速めたので、その影響も多少あるかもしれませんが、私自身、やはり授業進度は速かったと自覚し、反省しております。

従って、特に今年度については、実際の授業回数が少ないため、無理のないように授業計画を立て直すことが必要であると思いました。

実際に授業計画の見直しを行なった結果、春学期用に考えたスケジュール通りに進行できたかについては疑問のあるところですが、そのような方針で見直しできた意義はあるものと思っております。

「QA：授業技術」については、「話し方がよかった」が 74.6 パーセント、「板書がよかった」が 58.7 パーセントでした。話し方は多分、今は先生方を目の前にとっても緊張しているため、多少早口気味ということもありますが、学生の前では緊張はしませんから、声の大きな分、多分聞き取りやすかったと思います。また、「ここは大事ですよ」という箇所については、くどい程強調しましたので、その結果として割と高めの数値が出たものと思われます。

ところが、板書については「悪かった」という学生が 19 パーセント回答しており、平均と比べれば高いものの、私自身としてはもう少し数値が上げられるものと考えているので、一層の改善を行ないたいと思います。

具体的に、どのように改善するかということは難しい点ですが、もちろん字を丁寧に書くということもありますが、やはり板書をする際に、教室によって使い方が違ってくると思います。この授業は 7202 教室あるいは 7203 教室で行ないましたので、長い 1 枚黑板のため、両端あるいは下の部分に板書すると見づらくなります。そういう場合には、できるだけ下のほうには書かず、また、あまり端に書き過ぎないように工夫をする必要があると思います。

特に図を描く際に、本来は左端に描きたいのですが、まず中心ぐらいに図を描き、次に図の右に説明文を続け、書く場所がなくなると、普通は左端から書くのですが、図を見ながら説明をしたいために、図のすぐ左側に書いたりしてしまう。すると、授業によく出席している学生は理解できるでしょうが、遅れて入室した学生は、順番が違うから理解しづらいだろうと察しています。このような点は、今後すぐに改善できるものと考えています。

QBの「改善のポイント」は、「配布資料」が 50.8 パーセントと非常に多くなっていました。もちろん学生からの希望・アドバイスと受け止めて改善したいと思いますが、

「経済学」の授業に関しては、例えば統計データあるいは計算問題等の練習プリントを増やすことはしたいと考えております。ここで「増やすことは」と申しましたのは、学生は恐らくレジュメの配布を希望しているものと推察しているからです。一昨年度も、学生から、「レジュメがあれば、ノートを取らなくていいので配布してほしい」という要望がありました。しかし、その点については改善するつもりはなく、レジュメは今後も配布しない方針でいきたいと思えます。

最後に、4番目として「授業アンケートの結果についての意見・異論」と書いてありますが、私の感想を書かせていただきました。この授業では、先程も申しましたように、熱心な学生が非常に多かったということです。前々年度の教室は 7401 教室あるいは 3405 教室といった大教室で、非常にやりづらいものでしたが、昨年度は中教室になったため、学生の顔が一人一人確認でき、反応が分かりやすく、また、距離も近いので、学生も食い入るように聴いてくれるということもあり、授業を行いやすく感じました。

また、些細なことですが、特にこの「経済学」の授業では、授業が始まる前に「こんにちは」と言えば、学生も「こんにちは」と返してくれる。授業が終われば、もちろん質問に来る学生もいますが、質問がない学生も「お疲れ様」あるいは「さようなら」と言いながら教室を出て行くので、良い雰囲気でもとてもやりやすく感じておりました。

しかしその反面、一生懸命聴いてくれる学生が非常に多いので、「もう少し踏み込んで教えてもいいかな」あるいは「もう少し分かりやすく、こんな例で説明したらいいかな」と欲張ってしまいました。その結果、進度調整をすることとなりましたので、それについては反省点と考えております。これが「進度が速かった」若しくは「内容理解が薄かった」と答えた学生がいた原因ではないかと自己分析しております。

ただし、「授業の進度」・「内容理解」については、データを再度詳細に見直したところ、例えば、「履修した理由」については「関心を持っていた」・「将来に役立つ」と答えた学生や、欠席回数が少ない学生が、全員ではないにしても、「内容理解」では「理解できた」・「大体理解できた」と答え、「知的満足」でも「大いに得られた」・「やや得られた」に殆どの学生が含まれておりました。このような学生に対しては先ほど申し上げた点に気をつければ、もう少し数値を上げることも可能ではないかと考えております。

このクラスは、小テストの結果が良いため、安心して授業をしていましたが、小テストの結果が良いからと言って、よく「理解している」とは限らないこともわかりました。

つまり、小テストは簡単な問題かつ自筆ノートの持ち込みが可能であり、通常の定期試験とは違って、隣の学生に見せてもらうことも十分に可能であるため、完全に習熟度を測ることは出来ませんから、小テストについてはもう少し実施の方法を検討したいと思えます。

最後のまとめですが、私は大学教員になってまだ3年目で、「上手な授業」を行なうことはなかなか難しいですが、このアンケート結果を見て、こちらの意欲だけは学生に伝わっているのだということが分かりました。

このことを励みにして、今後はできるだけ丁寧に、かつ自分なりに少しでも「こうすれば学生が分かりやすいのでは」と思う方法で授業改善を行なえるように心掛けたいと思っております。以上です。（拍手）

（沼田）

どうもありがとうございました。引き続きまして、現代文化学部の岡田先生からご報告いただきたいと思っておりますので、よろしくお願い致します。

事例報告②（岡田安芸子現代文化学部助教授）

現代文化学部の岡田と申します。授業アンケート結果報告書と改善計画書は資料の2ページ目に掲載されておりますので、そちらをご覧ください。今回私が作成しましたのは「比較文明」という講義の授業改善計画書です。この講義は教養発展科目で、主に福澤諭吉や和辻哲郎について取り上げており、受講生は法学部・経済学部・現代文化学部の2年生以上となっております。

受講者数に関しては、アンケート結果では119名となっておりますが、これには旧カリキュラムに該当する4年生が含まれておりませんので、正確な数字は改善計画書に書きました139名です。したがって、「（1）授業アンケートの結果全体に対するコメント」に書きましたように、アンケートの回収率は69パーセントになりました。アンケート回答者数と単位取得学生数が一致するという結果となりましたが、これは出席する学生が固定化していたためと思われる。

まず、「（1）授業アンケートの結果全体に対するコメント」についてですが、私が気になった点としましては、「Q4：履修した理由」、そこで7の「時間割があいていた」という回答が32.6パーセントと高い結果であったことです。この32.6パーセントの学生が、結果的にどの程度授業内容を理解し、また知的満足を得ることができたのだろうと思い、配布された個人情報、「個人がどんなふうに回答を選んだか」を基に自分で計算をしてみました。すると、履修理由が「時間割があいていた」という学生は、総じて「内容理解」・「知的満足」の数値が低い、という結果がでました。「1・2の合計」と改善計画書に書きましたのは、「内容理解」は「よく理解できた」の1、「大体理解できた」の2を合計した数値、「知的満足」は「大いに得られた」の1、「やや得られた」の2を合計した数値のことです。

要するに、学生たちは授業に関心のないまま履修登録し、よく理解できないまま終わることになってしまったのではないかと思います。一方で、シラバスを読み、「関心

を持っていた」という積極的な理由で履修登録をした学生の場合は、それに比べると「内容理解」と「知的満足」の数値が高かったことから考えますと、講義の最初でまず学生の関心を高める、興味を持ってもらうことが必要なのではないかと考えました。

そういったことを受けて、「(2) 内容」に関してですが、ここでは主に「Q10：目標の明確さ」に関する改善策を書きました。これまでは初回と最終回で、講義全体の大きな目標を説明することが多かったのですが、これからは毎回の講義で前後のつながりをはっきりさせて、常に全体の目標を意識できるようにしたいと考えています。

また、先程お話ししましたように、特に初回で関心の低い学生を引き付けるために、講義の目標の魅力、どんなふう面白いかということをより積極的に伝える努力をしていきたいと思えます。更に、もう一つ改善策として挙げましたのが、途中で学生の希望を聞く、つまり、授業期間の中盤で感想のような形式で、授業に対する学生の思いを小まめに聞き、それを授業に反映させていくことを実施したいと考えております。

次の「(3) 方法」についてですが、こちらでは主に「QB：改善のポイント」で高かった回答に注目して改善策を考えました。QBを見ますと、まず「VTR」という回答が 39.6 パーセントと高い数値です。これまではVTRを使用せず、専ら文章を読むという形で講義を進めていました。しかしながら、やはり取り上げている人物の顔を見ることは大事だろうと思ひ、今年度は、特に福澤諭吉のビデオを、復習を兼ねて途中で視聴させたいと考えています。

もう一つ改善のポイントとして、「配付資料」も高い数値となっています。

これに関しまして「Q8：テキスト・資料が役に立ったか」という質問の答えを見ましても、「どちらともいえない」という回答が3割近いものとなっていて、やはり改善の余地があると認識いたしました。その問題点を考えてみますと、私の授業では毎回プリントを配布しているため、恐らく学生からすれば、なぜ毎回配られるのかその理由がよく分からなかったのではないかと推察しています。

また、資料によく原典を活用しているため、学生があとから読んだときに「難しい」あるいは「自分には不向きである」と感じたのではないかと思えます。

そこで、これからは資料配布の際には「配る理由」をしっかり説明し、難しい資料に関しては詳しく説明していくという努力をしていきたいと思えます。

最後の「授業アンケートの結果についての意見・異論」では、(1) から (3) で詳しく書くことができなかったことを、簡単に述べました。今回いろいろと数値を調べてみたところ、「内容理解」と「知的満足」の相関関係、つまり「内容理解」がしっかりしていれば「知的満足」は高くなり、あまり理解できないと「知的満足」は低くなるということは、今まで聞いてはいましたが、実感としてはあまりありませんでした。

しかしながら、今回調べてみましたら、履修理由が積極的であっても消極的であっても、理解できたという実感があまりないと、どうしても知的満足が低くなってしまふ。

そのため改めて、分かりやすく、学生がきちんと理解しているかどうかということの一つ一つ確認しながら授業を進めていくことが大事だと思いました。このように授業アンケートの結果を見ますと、いろいろと思ひ当たるふしがあり、改めてこの結果を参考に何とかこれから頑張っていきたいと考えております。申し訳ありませんが、大変緊張しているため、かなり早口の説明になりましたが、以上で終了します。どうもありがとうございました。（拍手）

（沼田）

引き続きまして文化情報学部の櫻井先生から、これまでのお二人は講義科目を中心にした授業改善計画ですが、櫻井先生は「語学」に焦点を絞った改善計画というご報告になるかと思しますので、よろしくお願ひ致します。

事例報告③（櫻井千絵文化情報学部専任講師）

文化情報学部の櫻井です。よろしくお願ひします。

それでは、外国語科目の授業改善計画書の一例としましてご報告させていただきたいと思ひます。昨年度、私が担当しました授業の中で、今日資料をお配りしましたのは「ドイツ語Ⅰ」という授業です。これはいわゆる初級文法を扱っているクラスで、初めてドイツ語の勉強を始める学生が最初に履修するクラスです。

毎年この授業を担当しているのですが、昨年度担当したこのクラスに関しましてはかなり雰囲気の良いクラスで、これは2年次に配当されているクラスですが、自主的に参加した1年次生もおり、全体的にも活気があり、一般的に言って「やりやすいクラスだったな」という印象があります。

しかし、その一方で陰に隠れて気付かなかったのですが、（1）のコメント欄に書いたとおり、「欠席回数が12回以上」と答えた学生が1名、テキスト、配布資料についても「全く役に立たない」と答えた学生、内容理解に「全く理解できない」と答えた学生が各々1名ずついました。雰囲気の良いクラスと思っていたのですが、その中で極端に出遅れた学生を見落としたことがこの結果を見て反省した点です。

先程、岡田先生の発表でも触れられましたが、学期の中盤で、例えば今ぐらいの時期に簡単なアンケートを採ることにより、授業内容及び学生の状態を把握していれば、もう少しフォローできたのではないかと少し後悔しています。

初級文法は授業の内容の性格から考えまして、春学期の段階でもう既に全く理解できないということは、秋学期になってから急に挽回するというのはまず考えられず、完全にやる気をなくしたものと察せられ、春学期の段階では1人も脱落させないように心がけていたにもかかわらず、結果として見落とすこととなりました。

引き続きまして、（2）の「内容についての改善計画」ですが、今回皆様にお配り

した結果報告は 2003 年度の春学期の資料であり、その前年の 2002 年秋学期の授業アンケート結果報告書と両方突き合わせて比較してみました。その結果、1 年程前に配布された 2002 年秋学期の報告書では、問 12「ことばを使う力」に関する数値が、私が担当する科目の平均が 2.5 でした。「平均」というのは全体の平均のことですが、この数値が 2.3 ですから、要するに全体の平均値を下回っていたわけです。外国語科目であるにもかかわらず「ことばを使う力」が全体平均よりも下回っているというのは好ましくないという印象を受けたことを記憶しています。

そこで昨年度は、この点を改善ポイントとして心に留めており、ドイツ語に限らずに日本語と比較しながら「言葉の作りはこんな感じだ」と、時には日本語の文法を説明するような気持ちで授業をいました。

その結果といえるかはわかりませんが、2003 年度は問 12 の結果が 1.8 とかなり好転しましたので、クラスによって異なるので一概には言えませんが、私としては「こんな感じでいいのかな」と、この調子でもう少し続けていきたいと感じました。

ただし、それと関係があるのかどうか分かりませんが、「教員の丁寧さ」と「内容理解度」が下がったことが今回気になりました。

特に問 10 の内容理解度に関しては、先程（1）の所でも申し上げました通り「全く理解できなかった」と答えた学生が 1 人、「やや理解できない」と答えた学生も 3 人おりました。先程の繰り返しになってしまうので省きますが、やはり春学期の段階でこのペースを維持すると少し厳しいので、できれば 5 月あるいは 6 月ぐらいまでに気が付けばフォローが可能となりますので、早い段階での丁寧な指導が必要だと痛感致しました。

更に、引き続きまして（3）の「方法についての改善計画」は、これは特に質問の Q B という所に注目してみたのですが、私の結果報告書の中でも一番下の「Q B：改善のポイント」を見ると何と言っても一番多いのが「配布資料」についてです。これは 2002 年度秋学期の時点から既に指摘されているのですが、「配布資料を改善してほしい」という要望が結構出されていました。

私もテキストに頼り過ぎの感がありまして、教科書を主体にして授業を行っていたのですが、やはりクラスの実情、つまり実力に合わせた配布プリントあるいは教材作りをその都度行わないと対応しきれないと実感しています。

「小テスト」に関しても、従来は小テストを行っていませんでしたが、小テストはむしろ「行ってほしい」という学生がやはり 2002 年秋学期にもいましたし、2003 年春学期にも 6 名つまり全体の 18.8 パーセントという回答がありました。これも基本的には、私は毎回の出席と学期末の試験で成績評価を出していたのですが、試験も一回だけの試験よりは随時小さなテストを行なうことにより雰囲気をつかむ、あるいは緊張感を持続させるという意味でも、小テストはむしろ行ってほしいと学生が希望しているという結果の現れであり、今学期から何らかの小テストを行うということを学生には伝え

てあります。

2003 年春学期の結果を見ると、「VTR」がやはり同じぐらい多いのですが、これは教材用のVTRがないため、これについても今後検討していきたいと思っております。

授業改善計画書には、そのほか「板書」についても書いてみたのですが、「板書」は実は 2002 年秋学期にもやはり何人から板書を改善してほしいというリクエストがありました。

量が少なかったのではないかと私なりに考えまして、昨年度は少し多めに心掛けたつもりでしたが、それでもまだ5名から改善してほしいという要望を出してきました。

この結果から、「量だけでは駄目だ」あるいは「字が汚いのかな」等々いろいろ考えたのですが、板書については、「学生によると筆記体が読めない可能性があるので、ブロック体で書いたほうがいいのか」という他の先生からのアドバイスをいただきました。

私は、筆記体が中途半端に交じる傾向があるので、「なるほど」と思い、今学期は気を付けて少し不慣れなブロック体で板書をしていますが、どのような結果が出るか注目しています。それでもまだ改善してほしいという要望がでた場合には「字自体が汚いという意味かな」と思いますが、現在、改善途中です。

以上、少し早口にまくし立てましたが、私個人の結果報告書についての考えたことを述べさせていただきました。

最後に（4）の「授業アンケートの結果について」ですが、この結果報告書の次のページをご覧くださいと思います。細かい数字が並んでいる資料を添付させていただいたのですが、「2003 年度授業アンケート、ドイツ語関連科目の結果一覧」です。

これは、実際には本学で扱っているドイツ語関連科目全てが列挙されているもので、今年の2月に実施されたドイツ語教科打ち合わせ（年1回ドイツ語担当の専任教員及び非常勤講師が一同に会して行なっている）のために独自に作成して配布した資料です。

今日お配りしました資料は、教科打ち合わせで配布された資料のうち、今日とりあえず必要な部分だけを私が抜粋したものです。「科目名」の欄には、「ドイツ語Ⅰ」…と並んでいますが、一番下2段ほどに「ドイツ語Ⅱ」が交じっています。これは文化情報学部で半期開講されている科目で「ドイツ語Ⅰ」が春学期、「ドイツ語Ⅱ」となりますが、両方の科目を合わせて他学部で開講されている通年科目「ドイツ語Ⅰ」と理解していただいで結構です。この科目は先程も申し上げました初級文法を扱っているクラスです。

担当者は伏せていますが、要するに下2段は文化情報学部の科目であるため、実際は私が担当したということをおきします。

こうして、他の先生方の授業結果と比較してみますと、これは新たに自分の授業を

振り返って反省する材料になると思いました。

例えば、「学習時間」の項目については、私が担当したあるクラスでは 4.0 という数値が出てしまいました。1 週間の自宅での学習時間 4.0 ということは 30 分以下になりますが、内心「これは少ない」という気がしないではありません。

宿題をもう少し課しても良いのかなと考えていますが、他の先生方の授業と比較しますと 3.3 の後半から 4 を少し超える程度であり、どの先生方もやはり宿題あるいは予習・復習を合わせても「1 週間に 30 分程度あればいいだろう」という感じで授業をされているということが推察できましたので、自分が突出していないことが確認できました。

「授業の進度」に関しては、これは私が担当したクラスの一つで 3.05 という数値が出てしまいました。3 に近いほど適度な進度であると思われませんが、学生にとっては少し速めと感ずる程度の方がいいのではと感じていましたので、3 を上回るということは少し遅いと感じた学生が何人かいたということになります。

これは、他の先生方の進度を見ても大体 2 点台の先生が大半ですから、私の 3.05 という数値は進度がかなり遅かったのではないかと思います。

したがって、進度を上げて内容理解度が下がるのは怖いですが、様子を見ながらもう少し進度を上げて授業を行っても良いかなという感があります。

また、先程の「板書」の件ですが、「問A」と書いてある所で板書は 2003 年度改善ポイントの一つでしたが、その結果なのか私が授業を行っている中で良い方のクラスにおいて、60.9 パーセントが「板書が良い」と答えてくれました。私なりに「これは改善した結果かな」と思いましたが、上段に目を移したところ 62.5 パーセントの数値が出ている方がいらっしゃり、「ああやはり上には上がっている」と感じました。この方からはアドバイスをいただいたこともあり、できればこの数値に近付けられるよう努力したいと思っております。

更に、最も気になったのが「問B：改善のポイント」です。これは先程のことと重複するのですが、やはり私のクラスでは 38.1 パーセントの学生が「小テストを行ってほしい」と申し出ています。これは他の先生方の結果と比較しても最も高い数値ですから、一回の試験で成績評価を行なうという姿勢が学生にとっては重圧を与えるのかなと感じまして、できる限りプリント配布あるいは小テストを行なう方針で教材作りに心掛け、今学期からすぐに実施したいと思えます。

以上、別途資料も付け加えてご説明しましたが、今回、授業アンケート自体だけでなく、他の先生方の授業と比較をすることにより、自分の授業を客観的に見直せる良い機会になったと私は個人的に感じました。以上です。（拍手）

(沼田)

どうもありがとうございました。最後に体育実技科目担当者の法学部狐塚先生からご報告いただきたいと思います。よろしくお願い致します。

事例報告④ (狐塚賢一郎法学部助教授)

体育の教員ということもあり、少し体を動かしながら話したほうが話しやすいので、立ったままで報告させていただきます。

配布資料をご覧ください。まず、先に発表された科目と異なるところは、アンケート結果をご覧くださいればわかりますように、だいぶポイントが高くなっています。

これは運動、スポーツを扱う科目であることにも起因していますが、初回の授業で同じ時限内に設定されている3～5種目の中から自分が希望する種目を選択し、その種目の授業を1時間受講するというので、ある程度自分の好きな種目を選ぶことによりモチベーションが高くなっているのではないかと思います。

この点についてはクエスチョンの4番をご覧くださいればと思います。その点を踏まえてお聞きください。

今回は「健康・スポーツ実習」という1年生担当科目のうち、火曜日1限に開講されているテニスを実技種目とした授業を対象といたしました。同じくテニスを種目とした「健康・スポーツ実習」を他に2コマ担当しており、これは火曜日2時限及び金曜日3時限に開講されていますが、火曜日1時限の授業が他と比較するとアンケート結果が悪かったため、反省の意味を込めてこの授業を対象と致しました。

なぜ、火曜日1時限が他の授業と比べて悪かったのかということについて自己分析したいのですが、一つは学生側の理由として、1時限目は学生の体が動きづらくてスムーズな授業運営ができなかったのではないかとことが挙げられます。また、このクラスの受講者は55名でしたが、テニスコート9面に対して程よい人数は、1コートに4名で計36名程度であり、学生が少し多すぎために、自ずと運動量も確保しづらくなるということも挙げられます。

次に教員側つまり私自身の理由としては、テニスコートが研究室から非常に遠いという点が挙げられます。つまり、チャイムが鳴ってからテニスコート向かった場合には5分から10分程度授業開始が遅れてしまうということになります。

学生側からすれば、1時限の授業、つまり朝早くから出席しているにもかかわらず、コートの前で待たされるということで授業が始まる前にモチベーションを下げたしまい、結果として、そういうことがアンケートにも反映されているのではないかと感じました。やる気のあるまじめな学生が待たされていることは、大いに反省しなければならず、「正直者が馬鹿をみない」授業運営ということを考えていかなければいけないと思います。

次に「内容についての改善計画」ですが、特にクエスチョンの12番、「演習の進

度」、5番「満足度」あるいは14番の「新しい発見」が、体育科目全体の平均と比べて低くなっています。

この火曜日1時限目の授業は、週の中で担当している「健康・スポーツ実習」で最初に行なう授業であり、例えば、第3週目の授業を行なう場合には火曜1時限を最初に行うこととなります。従って、火曜日1時限目で試してうまくいかなかったことを修正して、その後の火曜日2時限、金曜日3時限の授業で行なっていくこととなり、そういったことから他より満足度が低くなる、あるいは進度の不満が他の授業と比較して多くなるのではないかと推察されます。

具体的な改善計画ですが、まずは早いセッティング、つまり学生のモチベーションを落とさずに授業に入ることができるように配慮したいと思います。授業開始前にボールを出し、自由にボールを打たせるということにより、早く来た学生がそのままウォーミングアップをして、モチベーションを下げずに授業に入れるようにしたいということです。また、早くボール出して打たせておくことは、体力あるいは意欲のある学生にとっては運動量を確保することにもつながるのではないかと思います。

次に、練習メニューを経験者と初心者で分けることを考えたいと思います。特にテニスでは、初心者と経験者の技術レベルに差が出やすいので、ポイント、ポイントで練習メニューを分けることで、経験者に対しては運動の質を確保し、初心者にとっては初心者用の練習をこなすことでより細かい指導ができるのではないかと思います。また、経験者は練習の質を高めることになるので14番の「新しい発見」にもつながるのではないかと思います。

2年次配当の「健康・スポーツ演習」のテニスでは、練習メニューを分けていましたが、「健康・スポーツ実習」においても同様に行なうことを考えたいと思います。

最後に、雨天時における授業の改善についてですが、今までは雨天の場合でもなるべく体を動かす時間を確保するために、例えば、体育館の空いているフロアでボレーあるいはグラウンドストローク等の技術練習の復習を中心に行ってききましたが、今後は少し座学の時間もとるようにして、ルールや技術についての整理あるいは理解を促すようにしたいと思います。

プリント等資料も配布しますが、テニスコートで配布をした場合には、運動時間を確保したいためにどうしても説明が不十分になってしまうので、その補完に充てる時間も雨天時にとりたいと思います。

3番目の「方法」についての改善計画ですが、今回一番大きな改善点として「ふりかえり票」を個人的に作ってみました。これは授業を振り返っての感想あるいは疑問点を書かせることを目的として作成したのですが、現在2～3回程度書かせていますが、今のところは具体的な技術に対する疑問あるいは授業運営に対する意見等を書く学生はほとんどいません。「楽しかった」、「こういった練習が難しかった」といった漠然と

した感想が殆どですが、授業が進んでいく中で振り返りの内容が深まっていけば良いと思います。また、そうした学生の感想などを参考に進度の調整を図っていければと思っています。

4番の「授業アンケートの結果について」は、今回はこういう形式で同じ科目、同じ種目における比較検討が可能となったので、授業が開講される曜日・時限によっても違いがあり、そうした指摘には自分で思い当たる点も非常に多くあり、授業運営を振り返る上では非常に参考になりました。

自分が担当した授業の内容に関しては以上ですが、今現在、健康・スポーツ科目は専任教員5名、非常勤講師が11名で行なっており、「健康・スポーツ実習」は30クラス、「健康・スポーツ演習」19クラスを運営しています。体育実技科目で実施している事項のうち、他の教科の参考になればということで、具体的な取り組みを三つほどご紹介したいと思います。

一つは教科会議を開催していることです。これはほぼ1ヶ月に1回程度開催していますが、折に触れて体育実技科目の運営上検討しなければいけない諸問題を検討するという、体育実技科目担当教員としての意見の集約をする場です。

例えば、年度初めの健康・スポーツ科目を履修する上で配慮が必要な学生への対応の協議が挙げられます。年度当初の授業開始前の教科会議では、健康相談室職員及びカウンセラーに出席していただき、対象学生への対応を協議しています。

2番目に、曜日担当コマ責任者を配置しています。これは専任教員5名が1日ずつ担当していますが、授業運営の責任者として全体授業を取り仕切る、あるいは非常勤講師の方々と教科会議のパイプ役となることを目的としています。

3番目に体育実技科目担当でメーリングリストを作っています。これは、特に非常勤講師への連絡をスムーズにすることを目的にしていますが、年度初めの授業開始日の連絡、注意事項及び折に触れて注意していただきたい事項の連絡に利用しています。

3つの点について、ご参考になればということでご紹介致しました。以上で報告を終わります。（拍手）

（沼田）

どうもありがとうございました。以上、4人の先生方にご報告いただいたわけですが、実は、最初に20分間の質疑応答時間が用意されていると言いましたが、不可能となりました。

しかしながら、少し質疑応答の時間を取りたいと思いますので、先生方の活発なご意見をいただきたいと思います。

その前に、先に行なわれました4人の先生方の報告に対する山本先生からの総括あるいはコメントを簡潔にいただきたいと思いますので、その後、質問を受け付けたいと

考えております。よろしくお願ひ致します。

事例報告の総括（山本耕一教務部長）

もう時間がないというか、最初から時間のなさに焦っています。

前田先生の発表は、これは大学の『どこでも見られる風景』で、皆さんも恐らく同じような経験を持っていらっしゃるでしょう。「大体こんな感じで」という非常にいいサンプルであろうと思います。

岡田先生の場合には、とにかく「時間割が空いている」と言って履修した学生に対しても「何とかしよう」というファイトが感じられ、これは脱帽するほかはない次第です。

皆さんに技術面でお話しするのを忘れていましたが、櫻井先生がとられた手法を実践していただきたいと思います。昨年度の数値と比較するのは、「是非やってほしい」ということではありませんが、一つの有効な手法だと思ひます。

お願ひしたい点ですが、アンケート結果の再発行はできませんので、申し訳ありませんがアンケートの結果はご自分できちんと保管していただき、授業改善計画書についても提出前にコピーを取っておいていただき、翌年計画書を書く際に「去年はどんなこと書いたかな」と振り返るといふように、是非参考資料として利用していただきたいと思ひます。

櫻井先生が、ドイツ語の教科打合せの話をしてくださいました。

また、狐塚先生はグループ全体の運営の話をしていただいたのですが、こういうことは駿河台大学におけるFDの一環として大いに注目すべきものであり、できれば他の分野でも実施していただきたいと思ひ次第です。

狐塚先生の報告にありました、授業開始時にモチベーションが下がるという点につきましては、私にも思ひ当たる節がありまして、体育実技科目も通常の授業科目も全く同じだと考えました。皆さんも、いろいろなお考えあるいはご印象をお持ちだろうと思ひます。時間が少なくなりましたが、ご質問等ございましたら積極的にご議論いただきたいと思ひます。

質疑応答

（沼田）

それでは、先生方からご意見・ご質問をいただきたいと思ひます。

なお、発言される先生はお座りの机前面にマイクがありますので、それをご利用いただきたいと思ひます。どなたかいらっしゃいませんか。

（芦野）

法学部の芦野です。こんな若輩者が先に意見を言うのは如何かと思ひたのですが、

時間がないようですので質問させていただきます。

私のような若輩者は、毎回改善が必要と思い、月に1回程度は個人的に学生に対して、小テストと並行して意見を聴取しています。

今回のアンケート結果についてもそれと照らし合わせて「なるほど。やはりこう言われてしまったか」と思うところが数多くあり、また、今回4人の先生方のご報告も非常に参考になりましたが、集計その他についてお願いしたいことがあります。

今回、私に対してアンケート結果が7件配布されたのですが、必須科目でないにもかかわらず「必須だから」と回答しているケースがあり、また、AV機器を1回も使用していないにもかかわらず「AV機器が良かった」と2名が回答しているケースがありました。これはひとえに学生側の問題だと思いますが、これについては学生に「よく考えて記入するように」と指導するしか方法がないと思います。

(山本)

本当に慌しくて申し訳ありませんが、本日お配りした授業アンケートの結果報告につきまして、技術的なミスではありますが、演習科目4の選択肢9「クラス指定だから」という数値が表示されていません。言い訳をすれば、去年より今年の方が大分改善されたと感じてはいますが、今後とも一層の改善に向けて努めていきたいと思っています。AV機器、並びに適当に答えたと思われる項目に関しては、私も結構その手の回答されています(笑い)。これは「学生脅すしかないかな」と思っています。

(沼田)

他にございませんでしょうか。どうぞ。

(吉野)

法学部の吉野です。授業改善計画書を書くことについては全く異論がありませんし、有効だと思います。そこで、櫻井先生もご指摘されていたかと思いますが、例えば、前田先生あるいは岡田先生が担当されている講義科目で予習時間が30分以下あるいは0分という学生が大半を占めているにもかかわらず、そうした学生を含めた理解度が8割を超えていて、平均点が1点台という結果が出ていることを、どのように理解すれば良いのでしょうか。予習・復習をほとんどしない学生の多くが理解できる授業を目指すべきなのでしょうか。

通常、スポーツの場面では常にオーバーロードを掛け、トレーニング効果を得るのですが、もし何の方策もなく今のこのやり方で授業内容を評価するのであれば、数値が独り歩きしてただ学生に迎合しているだけではないかと感じてしまう一面もあり、その点についてはどう対処してゆけば良いのかという方向性を示していただきたいと思います。

(山本)

正直言って方向性は出せません。私自身も学生を見ていて、学生にどの程度勉強する習慣があるかについては分かりません。従って、恐らく今の吉野先生の問題提起を真摯に受け止めるとすれば、我々の側で、学生の授業時間についても独自に目標値を設定する、それに向かって様々な手を打っていく、ということになるのだらうと思います。その上で効果が上がらなければ、さらに授業改善計画に基づいて授業を改善していくことになると思います。

ただ、自分自身が実情をよく把握していないものに対しては、目標設定に消極的になるわけです。学生にどれほど勉強するという習慣があるかについては、私は非常に悲観的に考えていまして、もし吉野先生がおっしゃるようなことを取り上げていくとすれば、俗な言い方ではありますが、学生を机に向かわせるための系統的な努力ないしは工夫にはいったいどんなものがあり得るか、少し大上段に振りかぶることになりますが、そうしたことを考えなくてはいけないでしょう。

はっきり言えば、私自身が分からないので腰が引けているのですが、腰が引けたままではいけないと思います。何か折には、大学としてその問題を考える必要があると思います。

しかしながら、申し訳ありませんが私としては今のところこの問題をについて考えるための手掛かりがありません。駿河台大学の学生が、全般的に、どの程度勉強をする習慣があるのかについては見えていないということです。見えていないと言えば、「あなたは教務部長でしょう」と反論を受けることとなり、それは全くその通りでありまして、吉野先生の発言を契機に考えてみたいと思います。ただし、この問題の根幹は相当深いものであると推察されます。今回はその辺りでご勘弁いただきたいと思います。

(沼田)

吉野先生よろしいでしょうか。

(大貫)

同じ体育実技担当の吉野先生から発言があったので、少し補足いたしますが、吉野先生が疑問に抱いたことは、本学のようなレベルの学生を擁する大学ではよく起こりうることだと思います。例えば、「学生がよく理解できる授業をしなさい」という方針が出た場合、大体は授業時間内で完結するような講義構成の方向に向かいます。試験も予定調和の世界となる。そうなると、帰宅して机に向かわなくても済むということになるわけです。

学生に発展的な勉強をさせることについては、私達は本学で講義をする際には少しあきらめなければならないところも現状では残念ながらあると思います。従って、実際

には予習・復習をしなくても、授業を聴き、ノートテイキングをしていれば、それなりに小テスト、テスト、期末試験をクリアしてしまう、一見スマートのようで実はなんともし平板な学生達を輩出する、というジレンマに陥っている感があります。

(沼田)

どうもありがとうございました。

(門馬)

文化情報学部の間馬です。大変参考にもなり、いろいろ考えさせられる点もあり、非常に良い報告会であったと思います。

私自身が感じている点を1点挙げたいと思います。200人を超えるような、私も300人近くの受講者がいる授業科目を担当していますが、そうした大教室の授業では、実際のところ、いつも改善ポイントに「板書が駄目」などが挙がってしまいます。そうすると、7～80人の適正規模と考えられるような教室では「板書が駄目」という項目はそれほど出ないと考えられますが、やはり200人を超えるような大教室で行なう授業では、概してアンケートの数値が悪いように思えます。

こうした大人数の授業は、恐らく各学部とも抱えていると思います。その点については、私の努力が足りない点はもちろんあると思いますが、教室によっては努力の範疇を超えている場合もありますので、授業アンケートにおいても、あるいは授業改善の一環として、受講者人数の問題についてご検討をいただきたいと思います。

(沼田)

では、教務部長よろしく申し上げます。

(山本)

大規模講義につきましては、全学教務委員会でいつも問題になっております。と言っても、今までさしたる改善はできていません。

つまり、多少の授業コマの増設は行ないましたが十分とはいえませんし、今後の課題だと思っております。

授業改善計画をお書きになる際には、当然のことながらその辺りは自己点検・自己評価ということで斟酌しながら数値はお考えいただきたいと思います。

受講者数についての仮題は、確かにこちらに突き付けられた（私に突き付けられているのかどうか分かりませんが）課題であろうと考えております。

先程の吉野先生の提議に関して言うならば、もし学生に家で勉強させようとするならば恐らく我々が大学時代に受けた、行なわれた手法を現在の学生に使用しても効果は

ないと思われます。

全く別の手法を何か開発しないことには、現在の学生に対しては、大貫先生がおっしゃるような発展的な学習で机に向かわせるということは非常に困難ではないかと思ひます。

この件につきましても、今後の課題とさせていただきたいと思ひます。何かと宿題が増えますが、私が引き受けているわけではありまませんので気楽に答えさせていただきます。

(沼田)

この後に教授会が控えていますので、もうお一方ぐらひご質問いただければと思ひますが、どなたかいらっしやいますでしょうか。

いらっしやらないようですので、それでは、学長から最後に一言お話をいただきまして、第3回研修会を終了させていただきたいと存じます。

閉会にあたって（竹下守夫学長）

「最後に一言」ということですから、今日のFD研修会の全体的な感想を申し上げたいと思ひます。先ず、山本教務部長をはじめ4人の報告者の方々には大変有益な報告をしていただき、厚く御礼申し上げたいと思ひます。

実際に我々がよく言われることですが、他の教員の授業内容を実際に知る機会はなかなかありません。

今日は実際に自分の目で見ただけではありまませんが、アンケート結果を数値で見ることにより、他の教員の授業がどのように行われているか、また、その内容が学生にどのように受け取られているかが非常によく理解でき、これから本学で様々な形で、組織として教育内容を高めていく上では有益なものと思ひます。

吉野法学部教授からの問題提起は大変重要であり、私もお話を聞いて本当に胸を突かれるような思ひを致しましたが、山本教務部長ではありまませんが、効果的な改善策は困難なものと思ひます。

私自身も自分の問題として考えたいのですが、どうか先生方もいろいろな機会を通じて、お互いに議論されたり、あるいはご自分でお考えいただいた上で、何か良い方策がございましたら、是非教えていただきたいと存じます。

今日、教授会の開始時間が遅れることとなりまして、学部長の方々には申し訳ありませんでしたが、大変有益な研修会を開催できたものと思ひます。

皆様どうもありがとうございました。（拍手）

(沼田)

どうもありがとうございました。本日は司会の不手際により終了時刻がかなり延びてしまいましたが、この後は教授会となりますのでよろしくお願いいたします。皆様どうもありがとうございました。(拍手)

(研修会終了)